

同志社大学

2009年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2010年 3月22日提出

所 属	職 名	氏 名
文学部哲学科	教授	庭田 茂吉
研 究 題 目	レヴィナスとアンリにおける身体と時間	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究は、身体と時間の問題を取り上げ、以下の二点を明らかにすることを目指したものである。一つには、これまでの意識と物との対立に変わり、身体がこの両者の対立を完全に止揚するということであり、二つ目は、これまで「魂」という用語で考えられてきた問題は身体という用語によって取って代わられるということである。</p> <p>本年度は、以上の問題について、次の点が明らかになった。アンリの「キリスト教の哲学」において問題にされた、ギリシャ的なものとキリスト教的なもの、すなわち世界の真理と生の真理の対立は、実は真の対立ではなく、それはさらにもっと根本的な基礎付けを必要とするということである。このことは、現在私が翻訳中のディディエ・フランクの著作、『ニーチェと神の影』（2010年夏、刊行予定）において、アンリのいう対立、ギリシャ的形而上学とキリスト教神学との共通の土壌としての身体の見解によって明らかになった。要するに、ギリシャ的なものとキリスト教の真理は身体という共通の根をもち、この身体によって初めて成り立つというものである。これは、『ニーチェと神の影』における、フランクによる画期的な発見である。しかし、この発見には、レヴィナスの寄与するところも決して少なくない。私自身もまた、別の経路からではあるが、アンリからレヴィナスへと考察を進め、身体の問題に到達していたが、それは決定的なものではなかった。しかし、それが、今、フランクの身体概念の発見によって、本研究における身体の研究は新しい問題へと深められることになった。</p> <p>しかし、これだけでは本研究にとってはまだ十分ではない。なぜなら、フランクはさらに考察をニーチェの身体論にまで深め、現象学研究を別の次元へと開きつつあるからである。したがって、われわれもまた、上記の二点を根本的に解明するためには、レヴィナスとアンリの身体と時間の問題を、さらにフランクのニーチェの身体論を媒介することによって、一層深い地層への探索を始める必要がある。しかし、ひとまず、本年度の研究成果として、ディディエ・フランクの共通の根としての身体の見解にまで行き着いたことを指摘しておきたい。</p>	